



TITLE:

顔魅力評価の多面性とその認知構造(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

藏口, 佳奈

CITATION:

藏口, 佳奈. 顔魅力評価の多面性とその認知構造. 京都大学, 2015, 博士 (文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18715>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

| | | | |
|--|------------------|----|-------|
| 京都大学 | 博士（ 文学 ） | 氏名 | 藏口 佳奈 |
| 論文題目 | 顔魅力評価の多面性とその認知構造 | | |
| <p>（論文内容の要旨）</p> <p>人の魅力は多くの要因によって成り立つ。これまで、配偶者選択という生態学的な利益が、魅力の意義を最も説明するものと考えられ、検討されてきた。しかし、それだけでは同性の魅力には利益がなく (Senior, 2003), 魅力評価が性別を問わずに行える (Kranz & Ishai, 2006) ことは説明できない。また魅力評価には、経験や文化の影響も示唆されている。さらに人の魅力には、その人物との付き合いやすさや敬意といった社会的な関係も多分に含まれていると考えられる。そのため、単なる外見的な形の魅力なのか、生物学的な利益のための魅力なのか、または社会的な関係性の築きやすさを踏まえた魅力なのか、といった違いを考慮する必要がある。多岐に渡る魅力評価の構成要素のうち、どの部分に焦点を当てるのかによって、魅力は変動し、それが日常的に用いられる表現の違いとして現れているのではないだろうか。Geldart (2010) は北アメリカの文化において、魅力に関係する表現によって注視時間に違いがあることを見出したが、逆に、言語的な表現の差異を際立たせるのではなく、魅力に対する自然な反応の違いを見出すことによって、魅力が本質的に多面的な存在であることが明らかになると考えられる。</p> <p>本研究では、人の外見のうち、特に重要な要素と考えられる顔の魅力評価の多面性を明らかにするため、表現の差異や、魅力評価と同時に想起される内容の違いがもたらす影響について検証した。第1章の序論の後、第2-4章では実験研究について述べられた。</p> <p>第2章では、まず顔の印象評価において魅力に関係しうる表現がどのように異なるかを因子分析によって検討した。その結果、「魅力的」「美しい」「かわいい」が異なる因子に分類される可能性が示された。次に顔のベビースキーマ特徴を計測し、魅力、美しさ、かわいさの各評定項目への影響を検討した。程度の違いはあるが、今回測定したベビースキーマ特徴が魅力、美しさ、かわいさの評価に影響することが示された。その際、各評定の基準が混同されることもあったが、試行順序を考慮した場合には評定ごとに異なる影響が生じていたと言える。また評定者の性別に関わらず、美しさは性的な魅力を表し、魅力は性的でない魅力を表す傾向が議論できる。しかしかわいさについては、男女で捉え方が異なる可能性が示唆された。</p> <p>第3章では、周辺視課題を通して美しさとかawaiiさの相違を検討した。美しさの判断は中心視か周辺視かを問わないのに対して、かわいさの判断は周辺視で困難になっていた。また、周辺視でのかわいさの評価は男性参加者にとってより困難であることが示され、性差の影響がかわいさの判断においてのみ生じる可能性を示唆した。さらに、周辺視と同程度の低解像が、かわいさの評価における違いを生じさせた主な理由とは考えにくく、美しさの判断は周辺視においても行えるのに対して、かわいさの判断は中心視であることが重要であると示された。この結果は、美しさとかawaiiさの機能的な違いに関連するのではないかと考えられる。つまり、美しさは性的な魅力を担うのに対して、かわいさは社会的な魅力を表すことが示唆される。</p> <p>第4章では、魅力評価と同時にその人物との社会的な関係性を考えた場合と物理的な特徴のみに注意を向けた場合とで、魅力が記憶に及ぼす影響にどのような違いがあるのかを検討した。顔特徴のみを判断させた場合には、参加者の性別に関わらず低魅力の顔をよりよく再認する傾向が見られた。しかし信頼度や話しやすさを同時に評価した場合には、女性参加者が女性顔画像を観察する条件においてのみ、魅力が記憶に及ぼす影響は見られなくなった。これは、魅力と同時に評価する内容が参加者の態度</p> | | | |

に影響を与えていたことを示唆するものであり、社会的関係性について注目した場合には魅力が記憶に及ぼす効果が抑制されると言える。

そして、第5章では本稿の実験結果から示唆される内容について考察し、魅力の多面性と今後の展望について論じた。本研究では日常的な表現の中に魅力観の差異が見られることを示し、主に性的な魅力と社会的な魅力に大別できる可能性を示した。これはGeldart (2010)で示された結果と同様、日本人参加者においても魅力の違いを異なる表現で形容していることが示唆される。また、魅力が社会的な側面を担う場合には女性と男性で食い違う結果が確認されたが、性的な魅力では性差は生じにくかった。つまり女性は男性よりも、魅力の社会的な側面と性的な側面の双方に敏感であると考えられる。このように魅力評価における性差は魅力の担う機能の違いと関連していると言える。本研究では特に美しさとかわいさが魅力の異なる側面を表していることを示し、性別によって捉え方に違いが見られる可能性を示す一例となったと考えられる。得られた知見は、魅力評価における個人差を解明する一歩となることも期待される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、人の顔の魅力の諸要因とその心理的効果について、心理学実験の結果に基づいて論考したものである。

序論で述べられるとおり、人にとって外見的な魅力は大きな意味を持つ。中でも、顔は我々が日常的に他者と接する際に意識するものであり、顔の魅力は社会生活において大きな役割を果たしている。美しいことはよいことである、というステレオタイプのもと、魅力的な顔の人は社会的に評価されやすいことがわかっている。就職に有利なばかりか、裁判で寛大な処置を受けやすいという報告すらある。人がそれぞれに自らの機会を活かすために、また逆に社会的偏見に対するために、外見的魅力の心理的機序の解明には大きな社会的意義があるといえる。

顔の魅力には生物学的・生態学的基盤があると考えられる。つまり、顔が整っているかどうかは、よい子孫を残すための配偶者の選択において、遺伝的に問題がないか、男性性あるいは女性性を十分に備えているかを判断するための材料となりうる。しかし、論者はそういった議論だけでは満足しない。特に、我々は性的嗜好に関わらず両性の魅力判断を行えることを重視し、魅力の複合的な要因を再検討している。

人の外見的魅力の研究にはさまざまな切り口があり、特に社会学的な研究が数多くなされてきたが、本論文ではそうした面への言及は最小限に抑えられ、心理学実験の結果に基づいた実証的な議論を基軸としている。2章から4章にわたって、行われた数々の実験について述べられているが、基本的手法は、顔写真を見て、評価したり覚えたりする課題を行うことである。そこで論者が重視するのは、魅力に関する諸概念をあらかじめ定義して説明するのではなく、参加者の主体的な使い分けを重視して違いを問い直すことであり、そのための実験上の工夫を重ねている。また、男女による違いを重視する点も一貫している。

まず問題とされるのは日本語における「美しい」と「かわいい」という概念である。日本人はこれらを混同しがちとされるが、本研究では、これらの概念は確かに異なる様相を持ち、男女間にも若干の違いがあることが明らかにされた。第2章では、セマンティックディファレンシャル法を用いて女性顔画像の評定課題を行い、結果に因子分析を適用することによって「美しさ」「親しみ」「魅力」「年齢」という4つの評価因子が導かれた。「かわいい」は「親しみ」に属する。次に、構造方程式モデリングによるパス解析によって、目の大きさや丸さ、額の広さなどいわゆるベビースキーマ的特徴と魅力、美しさ、かわいさとの関連を検証した結果、美しさとかawaiiさは確かに異なる様相を持ち、男性は両者に性的な魅力の要素を見る一方、女性はかわいさに、より社会的な意味を付与することが示唆された。第3章では、画像が鮮明に見えない周辺視野において美しさが十分評価できるのに対してかわいさの評価は難しくなることが示された。この結果は単純に画像のボケだけでは説明できず、魅力ある人をみつけるための美しさと、十分注意を向けて愛情を注ぐことにつながるかわいさという機能的な違いを反映していると論じられた。機能の違いを支える機構上の違いにまで考察が至っていない点は惜しまれるものの、まずは現象の実証的な記述だけでも十分価値がある。

第4章では、顔の記憶と魅力の関係が調べられた。全般には魅力が低い顔のほうがよく覚えられたが、これは用いられた顔写真の幅によると考えられた。特に、女性の顔を女性が見た場合、そのような魅力による違いは、自分との社会的関係性に注目した場合にのみに生じ、単に顔の造形のみ判断した場合には生じなかったことが新規な発見であり、これは外見的魅力の社会性を強く示すものであった。

このように、本論文では全体を通して顔の魅力における異なる側面と、その社会

的意義が論考された。「かわいい」という概念は日本文化を象徴するとも考えられ、さまざまな論考が行われてきたが、それが魅力の他の側面とどう重なり、どう違うのかが、実証的に示された点に大きな意義がある。用いられた顔写真および参加者が大学生・大学院生を中心とした年齢層に限られ、また、魅力が際だって高くも低くもない一般的な範囲にとどまったことによって議論の適用範囲に制約がある点是否めないが、対象となったのが特に異性の選択や社会性の拡大という点で最も重要な世代でもあることは認めたい。また、対象を人の顔に絞ったため、一般的な造形の美しさや動物などのかわいさといった、広い意味での外見的魅力との関係が明らかにならないことは惜しまれる。しかしながら、単に主観的な評価だけに頼るのではなく、視野の効果や記憶といった行動機能面からの評価への試みは心理学の研究として高く評価できる。また、各種の手法を習得したことで、さらに今後の研究への展開が期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。平成27年2月23日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。